



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	2012ホリデーイン日高 実施報告
Author(s)	高橋, 彩; 青木, 麻衣子; 中村, 重穂
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 16, 134-145
Issue Date	2012-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52702
Type	other
File Information	JISC16_007.pdf



2012ホリデーイン日高 実施報告

高橋 彩・青木麻衣子・中村重穂

要 旨

本稿は、2012年度に実施された「ホリデーイン日高」（7月21日（土）～22日（日））の実施報告である。当企画はもともと外国人留学生に対する異文化理解促進のための国際交流行事であったが、2010年度からは多文化交流型の行事として発展させるため担当者たちがそのしかけづくりに取り組んできた。

昨年度より、学部生向けの全学教育科目である一般教育演習（フレッシュマンセミナー）「『国際交流』を実践する」と連動させて実施し、日本人学生や参加者間の異文化理解を促進することにも力を注いできた。留学生が日本の文化に触れ、地域社会と交流する機会であるだけでなく、日本人学生を含む参加者全員にとって多文化交流型の教育的行事になるように変化させている。本年度は、実質的な交流が促されるようなしかけをさらに盛り込んだ。

引率者の観察とアンケートの結果からは、参加者が体験的に日本の社会文化を知り、参加者間の交流を楽しんだことが分かるが、より円滑な事業の運営や多文化交流の効果という点で今後取り組むべき点も明らかになった。

〔キーワード〕 多文化交流、異文化理解

1. 本報告の目的

「ホリデーイン日高」は、毎年夏に開催される日高の「樹魂まつり」の週末にあわせて開催される国際交流行事である。1泊2日の日程で、共催者である国立日高青少年自然の家（以下、自然の家）に滞在し、祭りへの参加を通して、日高の自然と日本の社会・文化に触れ、人々との交流を促す課外行事で、全学の留学生を対象として参加募集している。留学生センターが設立されて間もない1991年に始まったプログラムで、センターの恒例行事となっている。

2010年度以降は、日本人学生との交流を目的の一つに加え、従来2～3名の学生ボランティアとしての位置づけにあった日本人学生の参加者を10名程度まで増やし、プログラム自体の性格・内容の変更を試みてきた。特に昨年度以降は、主として学部1年生向けの授業「『国際交流』を实践する」(一般教育演習(フレッシュマンセミナー))受講者が、授業の最後にこの行事に参加するとの位置づけに変更し、日本人学生が積極的に行事の運営に関わる体制の構築に努めてきた。

本稿は、これまでの取り組みを背景に、2012年度「ホリデーイン日高」の実施報告を行うことを目的とする。行事实施までの道のりと当日の流れを時系列的に記すことにより、各段階で必要とされた工夫やそこで残された課題についても言及したい。また、最後に、当行事の運営における課題と教育的な行事としての今後の展望について述べる。

2. 実施までの道のり

本年は5月より実施の詳細を計画する作業を開始した。国際本部留学生センターと国際支援課の担当者が、実施概要と実施までの手順を検討し、5月末に自然の家の担当者との会合を持ち、募集日程や準備に必要な事柄の情報共有、実施内容等について概要を協議し、今後の準備に向けての作業等を確認した。

本行事の主目的は、外国人留学生が、「ひだか樹魂まつり」への参加と同行する日本人学生、日高の人々との交流を通じて、日本の社会・文化と人々への理解を深めることである。また、前回より力を注いできた参加者同士のコミュニケーションの促進も目標の一つとした。これは、留学生を含む全参加者が文化の多様性を認識し、考える機会になるような行事を意図したためである。よって、内容についても、前回活発に交流が行われたバーベキューと二日目の交流活動を継続発展させるように進めることにした。

募集人数も参加者同士のコミュニケーションが最大限に行われるように外国人留学生の定員を50名(先着)とし、ファシリテータ学生として日本人学生を中心とする「『国際交流』を实践する」の履修者25名とした。参加者間の多文化交流を促す教育的な目的があることから一般募集対象者は留学生とし、留学生の家族や研究員は対象外とした。留学生センターより教員3名と国際支援課の職員2名が引率した。

参加者の募集は6月中旬に開始し、ポスターの留学生センターHP掲載と紙媒体のポスターの掲示、留学生に対するメールサービスへの配信等により広く周知した。申し込みを円滑に行うため、申込書はHPからダウンロードできる形にし、国際支援課窓口へ参加費を添えて持参することとした。

ポスターには現地での活動内容がイメージできるように、大まかなスケジュールと昨年の写真数点を盛り込んだ。また、事前に、施設での日本式の風呂の利用についての懸念があったことから、共同浴場であることを明記した。さらに、あくまでも大学が行う教育的行事であり、行事の目的を達成するためグループでの活動が求められることから、グループ行動を原則とすることも記載した。ポスターは、これらの必要な情報を盛り込み、かつ学生の目を引くように、国際支援課の担当者が工夫し、作成した。

また、次項で述べるが、今年初めて、「『国際交流』を実践する」の授業の一環として、学生による「ホリデーイン日高」の説明会を開催することとし、その日程（7月3日および10日18:00より）も案内した。説明会の広報ポスターは、後日学生が授業内で別途作成し、国際本部1階に掲示したが、募集の時点では、日程のみを示すにとどめた。



図1 「ホリデーイン日高」募集ポスター（日本語版）

3. 実施報告

本年も、昨年に引き続きファシリテータ学生の活動が生かせるように行事を構成した。

「ホリデーイン日高」日程表		'Holiday in HIDAKA' Schedule	
7/21(Sat.)		7/22(Sun.)	
8:00 国際本部 集合	Meet at the lobby of ISC	7:00 起床	Wake-up
8:30 出発(途中、PAで休憩)	Departure(Break in a PA)	7:15 朝のつどい	Morning Ceremony*
11:00 日高到着	Arriving at HIDAKA	7:30 朝食・清掃	Breakfast/Clean up your room
11:15 オリエンテーション	Opening Ceremony*	8:30 清掃点検	Check your room
12:00 荷物移動	Take your luggage in your room	9:15 交流プログラム	Workshop*
12:30 昼食 (BBQ)	Lunch(BBQ)*	10:30 移動(→ビラパーク)	Go to the Villa Park
14:00 BBQ片付け	Clean up	12:00 流送レース予選	Logpulling Race(First stage)*
14:30 移動(→こもれびホール)	Go to the Komorebi Hall	13:00 国際交流ステージ	Stage performance*
15:00 踊りの練習	Dance Practice*	14:30 流送レース本選	Logpulling Race(Second stage)*
16:00 パレード	Join in the parade	15:10 もちまき	Mochimaki*
16:55 移動(→日高青少年自然の家)	Go back to the Center	15:30 別れのつどい	Farewell Ceremony*
17:15 夕食	Dinner*	15:45 出発(途中、PAで休憩)	Departure(Break in a PA)
18:15 移動(→ビラパーク)	Go to the Villa Park*	18:00 北大到着	Arriving at University
18:30 お祭り参加	Join in the festival		
20:00 花火大会	Fire Works*		
20:45 移動(→日高青少年自然の家)	Go back to the Center		
21:00 入浴・自由時間	Free Time & Bath*		
22:00 就寝	Bedtime		

場所
Place

- * → 日高青少年自然の家 HIDAKA Youth Outdoor Learning Center
- * → こもれびホール Komorebi Hall
- * → ビラパーク Villa Park

*貴重品は常に携帯してください。
Keep all your valuables with you throughout the program!

図2 「ホリデーイン日高」しおりより

3-1. 「ホリデーイン日高」一日目

7月21日（土）の当日朝、ファシリテータ学生と引率教職員が7：30に集合し、顔合わせと2日間の流れ、この後の受付方法について打ち合わせを行った。ファシリテータ学生は、授業の中で行事の概要と大まかな流れは知らされていたので、当日のミーティングでは、最終スケジュール確認といくつかの注意点等を伝達した。

全参加者へのスケジュール確認と注意事項は、例年通り、引率教員がバスの中で英語と日本語で行った。しかし、書いたものでも確認できるように、また施設の使い方等の詳細—ごみ処理方法、布団のたたみ方—は配布するしおりに、要点を絞って、二言語でわかりやすく表記した。このしおりは、国際支援課が毎年改訂を重ね作成しているものだが、今年は特に携帯しやすいようにとA5版の持ちやすいサイズにした。行事運営においては、このような細かい配慮が重要である。

8：30より国際本部玄関で、グループごとに受付を開始した。この受付は、単なる参加者確認ではなく、ファシリテータ学生とグループメンバーの顔合わせの機会でもある。受付では、しおりとうちわ、水（ペットボトル）が渡されるとともに、ファシリテータ学生と参加留学生との間で挨拶

が交わされる。グループは国籍や言語等ができる限り多様になるように主催者側で組んだものだが、この受付作業を通して、ファシリテータ学生は早速、授業でも学習した言語だけではないコミュニケーションの重要性を実感することになる。

今回は、自然の家と協議し、日高でのオリエンテーションをバーベキューの前に入れることにした。これは、バーベキュー会場で短いオリエンテーションの後、すぐにバーベキューを始めたためグループメンバーがよく知り合う時間が十分に持てないまま食事作業に移らなければならなかったという昨年の反省からである。

オリエンテーションでは、自然の家と北海道大学からの挨拶の後、参加留学生とファシリテータ学生代表者によるスピーチが行われた。国際交流行事を体験する中で行うこのようなショート・スピーチも、目的に即した内容、言語で話すというトレーニングの場である。

セレモニーの後は、ファシリテータ学生が、各グループであらかじめ考えた互いを知り合うためのアクティビティーを行った。他己紹介やクイズ等、様々な工夫がなされ、ファシリテータ学生にとっては「交流」を実践する場となり、留学生参加者にとっては、互いを知り合う導入活動となった。この後、野外のバーベキュー場に移り、同じグループごとにバーベキューを行ったが、オリエンテーション時の活動の流れがあり、今回はよりスムーズに作業や歓談が行われていたようである。

昼食後は盆踊りの練習である。毎年、日高町の方が踊りを教えて下さるが、まさに日本の「踊り」を体験する機会であり、はじめて踊る留学生が先生の動きを見ながらいきいきと練習に励む姿が印象的である。しかし、今年は踊りの練習前と練習後のパレードの出発時間までかなりの時間があいてしまった。この辺の時間調整は今後の課題である。

パレード終了後は自然の家に戻って夕食をとり、その後祭り会場に移動した。参加者はステージでの様々なパフォーマンスや会場の屋台を、思い思いに楽しんでいた。ここでは特にグループ行動は要求していなかったが、日中の活動を通して知り合った参加者が、ともに行動している姿が見受けられた。

3-2. 「ホリデーイン日高」二日目

翌日は、朝のつどいから始まった。多くの留学生にとっては初めての「ラ

ジオ体操」が行われるが、これも一つの日本文化体験である。朝食後は、自然の家によるワークショップが実施された。今回は、札幌国際大学のインターンシップ生による「交流」のためのアクティビティーが体育館で行われた。ロープの中に数字の板を入れてそれを順々に踏んでいく競技や複雑に絡み合った手をほどいていく作業等、どれも体を使い、チームワークを要するものであった。全く違う参加者同士の協働の感覚を体感することができる活動であったと思う。インストラクターとして参加者を楽しませながら指導してくださった札幌国際大学の学生さんたちに感謝したい。

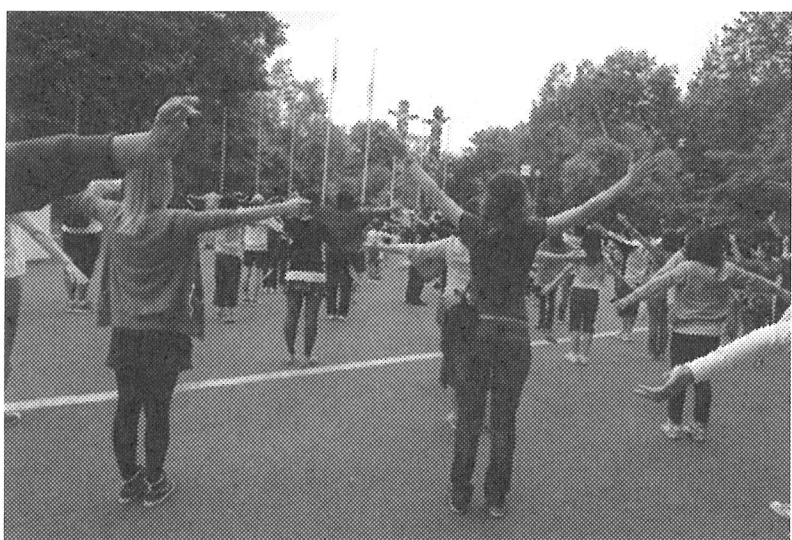


写真1 ラジオ体操



写真2 「交流」アクティビティー

その後は祭り会場に移動し、国際交流ステージの披露と流送レースに参加した。今年のステージでは、台湾、ミャンマー、中国の参加者から地域の童謡や歌の他に、中国語で歌う日本の歌謡曲や、英語でのデュエットにより世界的に有名な歌等が紹介された。またブレイク・ダンスを披露してくれた参加者もあり、会場からは大きな拍手を頂いた。国際交流ステージでは、国や地域の「伝統的な文化」の披露が期待されていると考えているが、留学生のステージ参加の希望状況からは、その国・地域固有のあるいは独特の「文化」ではなく、グローバル化した「文化」の波が押し寄せているように思う。

祭り会場では、参加者が引き続きステージでのパフォーマンスや屋台、出し物等を思い思いに楽しんでいた。5名一組で3本の丸太を引いてその速さを競う「流送レース」は、優勝こそ逃したが、上位入選した組もあり、

競技者も応援する方も大変盛り上がった。

今年の「ホリデーイン日高」は、体を動かしながら様々な活動を楽しく体験することを中心に「交流」した行事であった。



写真3 流送レースの様子

4. 参加者アンケートの結果

本年は開始時と終了時の2回アンケートを実施した。「交流」という点で、参加者の期待に応える内容であったか、多文化交流行事としての効果があったのかを確認するためである。集計の結果は以下のとおりである。

2012年ホリデーイン日高

アンケート①(開始時)

回収数	36
英語回答	7 *
日本語回答	29
*内1件は日本語でも回答	

1. 所属

理系	19
文系	16
無回答	1
合計	36

2. 所属課程

大学院	22
学部	5
HUSTEP/日研	4
その他	4
無回答	1
合計	36

アンケート②(終了時)

回収数	40
英語回答	7
日本語回答	33

1. 所属

理系	24
文系	16
無回答	
合計	40

2. 所属課程

大学院	24
学部	6
HUSTEP/日研	4
その他	6
無回答	
合計	40

3. 楽しみな部分(複数回答可)

バーベキュー	21
盆踊り	21
花火	29
ワークショップ(22日午前)	11
国際交流ステージ	17
流送レース	9
その他お祭りの催し物	7

3. 楽しかった部分(複数回答可)

バーベキュー	26
盆踊り	21
花火	33
ワークショップ(22日午前)	15
国際交流ステージ	20
流送レース	30
その他お祭りの催し物	12

4. どうして参加しようと思ったか(複数回答可)

国際交流	22
日本人の友達ほしい	19
留学生の友達ほしい	15
日高に行きたい	15
日本のお祭りに参加したい	18
友達が行くから	9
その他	0

4. グループの仲間とよく交流できたか

Yes	38
No	2
合計	40

5. 何で知ったか *

留学生センターHP	14
ホリデーイン日高ポスター	5
友人から	13
先生から	3
留学生メール	6
その他	0

* 複数回答可の指示はなかったが回答者は複数回答していた

参加者は理系と文系では大差なかったが、課程別では大学院が約6割を占めた。もともと本学の大学院留学生比率が高いことと、学部生はちょうどこの時期前期授業の終盤で期末試験の時期であることから、課程別の参加者の比率は予想の範囲内であるが、多文化交流を目的とする行事であるため、より多くの短期の留学生（HUSTEP、日本語日本文化研修生）の参加を期待したいところである。

内容については、「楽しみな部分」の各項目について、全体的に終了時の方が高くなっており、現地での諸活動を肯定的に体験したことがうかがえる。特に、「流送レース」については、開始時回答数9から終了時30と大幅に増加している。申し込み窓口で「流送レース」の写真を見せるなどして説明し、また学生による説明会でも紹介しているが、あまりイメージできていなかったことと、現地でのレースの盛り上がりを経験したことで、回答数が跳ね上がったと推察される。

参加の動機については、「国際交流」への関心の高さとともに、日本人のあるいは留学生の友達がほしいという人との「出会い」と「つながり」を期待する動機が高いことが注目される。また、「日高に行きたい」「日本

のお祭りに参加したい」への比較的高い回答数からは、地域や日本文化に対する好奇心がうかがえる。過去には友人等との申し込みが多く見受けられたが、「友達が行くから」という動機は、人との交わりや異文化への関心に比べると、決して多くないことがわかった。しかし、この行事について、「友人から」知ったのは「HPから」に次いで高い回答数を得ており、学生の間で話題になる行事にはなっているようである。

当行事が力を注いだ参加者間の交流については、「グループの仲間とよく交流できたか」という設問で尋ねたところ、概ね肯定する回答を得られた。しかし、「No」という回答もあり、自由記載欄に書かれた「より考えや議論を交わすのがよい」（原文は英語記載）という意見にも反映される通り、じっくり議論をする時間がなかったことから、楽しいだけでなく、より深い「交流」を望む参加者の姿が見えてくる。

5. 引率教員の感想と来年に向けての改善点

既に青木（2010：36）が指摘しているように、この行事は「国際交流」の場を意図的に提供し、「『交流』行事の一環に位置づける試み」として過去様々な工夫を行ってきたが、特に「交流」のために意図的に「介入」〔青木（2010：43）〕を行うことによって、日本人学生の留学生、あるいは国際交流に対する意識—もっと言えば“先入観”—を解体し変容させるという効果をもたらしてきた。これは、日本人学生が単なる“参加者”の枠を超えてファシリテータとして活動することによって一層その効果を深めたと言ってよい。こうした意識変革を果たした日本人学生が今後の大学生活で「国際交流」のみならずより広い人間関係構築過程でどのようにこの体験を活用し展開していくか長期的な追跡調査を行い、さらに教育効果を高めるプログラム開発のための協力者として今後も留学生センターと繋がりを保つことが望まれる。これは、主として日本人学生の側に関わる感想であるが、留学生や実施主体の側からはさらに以下のような改善点が考えられる。

第一点としては、行事の日程の問題がある。従来この行事への参加者は、前述のように比較的大学院生が多かったが、昨年度、及び今年度は学部1・2年次留学生にも日本語の授業時に広報活動を行い若干名の参加を得ることができた。しかしながら一日高町の日程に合わせざるを得ないこともあるが—、学部生にとっては学期末試験の直前にさしかかる時期であること

から参加したくてもなかなか踏み切れない学生もいたと推察される。この点について可能であればさらに多くの留学生が参加できる時期に実施できればと考える。

第二点としては、危機管理態勢の整備という問題が挙げられる。今年度は、初日夜の花火大会に於いて花火の誤発射があり、打ち上げ場の対岸の観客席の下に花火が着弾・発火して見物客が負傷するという事故が発生した。幸い本学学生に負傷者は出なかったものの、一花火に限らず一不測の事態発生に際して迅速かつ的確な対応と連絡が取れ、また何よりも参加者の不安や心配を極力低減化できるよう引率教員・事務職員で検討を深め準備を整える必要があると思われる。

第三点としては、スケジュールの変動に対するより柔軟で有効な対応が、引率教員・事務職員とファシリテータ学生に求められるということを指摘しておきたい。今年度は天候に恵まれ、盆踊りパレードに参加することができたが、前述したように踊りの練習の前後にかなりの待機時間が生じ、この時間を若干もてあまし気味にしていた学生もいたように見受けられた。これは、日高町側の都合・事情もあるのでやむを得ない面もあったが、今後もこうした急な空き時間が生じることは予想できる。今回は、特段の手だてや「介入」が行われなかったが、考え方によってはこうした空き時間も格好の「交流」の時間と捉えることができよう。こうしたタイミングを捉えて臨機応変に活動を展開し、交流体験をさらに共有できるような対応力をファシリテータ学生が身につけていくことが望ましい。

第四点としては、日高町側の今後の工夫に期待する、ということを挙げておきたい。「樹魂まつり」の会場は、基本的に出店とステージが中心で、謂わば一般的な日本の地方の祭りの会場の風情を有している。それにはそれとしての良さも勿論あるが、留学生センターの側が青木(2010)、及び高橋・青木・鄭(2011)で記しているように「ホリデーイン日高」という企画をより教育効果を持ったものに“進化”させてきた経緯があることから、その期待値に対して、留学生が日高町の伝統的な祭りの会場で過ごし自国の文化的演目を披露するという参加形態が徐々にミスマッチになっていく面も出てくるのではないかという予感もする。この点については、今後の慎重かつ入念な打ち合わせが必要であろうが、日高町の「樹魂まつり」の実行主体も留学生との交流により連携的・有機的な新機軸を打ち出すことができるような「しかけ」を双方向的に考えていく時期ではないかと思量

する。

以上四点にわたって感想を述べてきたが、母体である授業、一般教育演習（フレッシュマンセミナー）「『国際交流』を実践する」に於いて「国際交流」が醸成されていくプロセスが、国際本部、留学生センターの一つのミッションとして研究面でも教育面でも、北大のみならず日本全国の大学に対して一つの望ましい、そして柔軟性に富んだ「国際交流」の活性化モデルを提供できるようになることを主催者の展望として最後に述べておきたい。

謝辞

当行事を長年にわたり共催頂いております国立日高青少年自然の家、「樹魂まつり」への参加につきお世話になりました日高「樹魂まつり」実行委員会の皆様をはじめ、毎年温かく「ホリデーイン日高」一行をお迎え下さる日高の地域の皆様に厚く御礼申し上げます。また、本稿の作成において関係資料や写真の提供につき、国際支援課の担当者に大変お世話になりました。

引用・参考文献：

青木麻衣子（2010）「留学生と日本人学生の『交流』を考える—ホリデーイン日高」2010活動報告『北海道大学留学生センター紀要』第14号 pp.33～49

高橋 彩・青木麻衣子・鄭 恵先（2011）「2011ホリデーイン日高 実施報告—多文化交流行事への道」『北海道大学留学生センター紀要』第15号 pp.80～89

たかはし あや（留学生センター准教授）

あおき まいこ（留学生センター講師）

なかむら しげほ（留学生センター准教授）

[Report] 2012 Holiday in Hidaka

TAKAHASHI Aya, AOKI Maiko and NAKAMURA Shigeho

This paper aims at reporting an international exchange event, 2012 Holiday in Hidaka. This weekend excursion is organized by International Student Center, Office of International Affairs, Hokkaido University and National Hidaka Youth Outdoor Learning Center every year. The main purpose of the event has been changed from promoting cross-cultural understanding for international students to providing the opportunity to participants for multi-cultural interactions over the last three years. This time, assisted by 25 students who took a course for freshmen, 'Practicing International Exchange' (Freshman Seminar), the Holiday in Hidaka was operated. The questionnaire surveys made at the beginning and end of the trip show that the participants enjoyed the opportunity to have some knowledge of Japanese society and culture and that there were good interactions between the participants. However, there are a few agenda to be considered in order to improve the event further for the next year from operational and educational perspectives.